

気分転換したいときは、雄大なメコン川を眺めるといふ倉田。「朝日が昇ってくるのを見ていると、『よし、また頑張ろう』と元気をもらえますね」。



KURATA PEPPERの商品ロゴやパッケージは妻・由紀がデザイン。胡椒が売れなかつたころから、新しいアイデアを出して支えてくれる頼もしい存在だ。GWの5月3日、4日には東京の代々木公園で、日カンボジア友好65周年を記念して「カンボジアフェスティバル2018」が開催される。KURATA PEPPERのブースでは倉田が胡椒を販売。

Photo by Hirokazu Takayama



今年カンボジアと日本の外交関係樹立から65周年という節目の年。2月には文化交流行事「日本カンボジア絆フェスティバル」がブノンベン大学で行われ、倉田の店もブースを構えて協力。胡椒入りソーセージや天むすがカンボジアの人々に大好評となった。

生きる意味を 教えてくれた国

Cosmopolitans 291 Hironobu Kurata

なる。だがそれは同時に後追い企業を増やすことにもつながった。

「胡椒について尋ねられた際、誠意を持って対応していたことが、実はライバルにアドバイスをしていたようで(笑)。だからといって応戦するのではなく、自分は常に実直であり続けるということ、そしてそれをわかってくれる人々がいるということ、これまで以上に大切に思えるようになりました。心に疲れを感じたとき、私はメコン川のほとりまで朝日を眺めに行くんですよ。真っ赤に輝きながら昇ってくる朝日を見つめていると、また頑張ろうという気持ちになれますね」

倉

田がカンボジアに興味を持ち始めたのは、中学時代に見た映画がきっかけだった。

「当時は戦争映画が多く、またピエーリツツァー賞を受賞した写真家、沢田教一の作品に出合ったときには、胸が震えました。その後、カンボジアの内戦を描いた映画を見たことから、『いったい何が起きているのだろう』と悲しい過去を持つカンボジアについて調べようになったんです」

実は倉田が中学三年生のとき、突然の事故で兄が他界した。兄弟喧嘩をして互いに口を利いていない時期だったので、それが余計に